

聖書: ヨシュア記 10:1-43

説教題: 主が戦われる

日時: 2010年6月20日

先週見たヨシュア記9章で、イスラエルはギブオンの住民と盟約を結びました。彼らに騙されたとは言え、ヨシュアとイスラエルは、主の名にかけて誓った誓いを守る道を選びました。そのギブオンの住民が今日の章で周りの町々から攻撃されます。エルサレム、ヘブロン、ヤルムテ、ラキシユ、エグロンの5人の王たちは、ギブオンがイスラエルと和を講じ、自分たちを裏切ったことに怒って、連合軍を結成して攻めて来ます。そこでギブオンの人々はイスラエルにSOSを出します。6節に「あなたのしもべどもからあなたの手を引かないで、早く、私たちのところに上って来て私たちを救い、助けてください。山地に住むエモリ人の王たちがみな集まって、私たちに向かっているからです。」とあります。

イスラエルは面倒な戦いに巻き込まれることになりました。彼らとしては、ギブオンからのSOSを無視することもできました。相手は5つの町の連合軍です。困難な戦いが予想されます。しかしヨシュアは、すべての戦う民と、すべての勇士たちとを率いて、ギブオンへ上って行きます。盟約を誠実に守ろうとしたのです。

そんな中、ヨシュアに主の言葉がありました。8節:「主はヨシュアに仰せられた。『彼らを恐れてはならない。わたしが彼らをあなたの手へ渡したからだ。彼らのうち、ひとりとしてあなたの前に立ち向かうことのできる者はいない。』」この主の言葉からイスラエルがこの時、ギブオンを助けに行くことは主の御心になかったことだった、とはっきり知ることができます。主はここで力強い保証を下さっています。「彼らを恐れてはならないこと」「彼らをすでにあなたの手へ渡していること」「だれひとりあなたの前立ち向かうことのできる者はないこと」ヨシュアはこの言葉によって一層勇気を得て、夜通しギルガルから上って行きます。

さて、このエモリ人との戦いにおいて強調されていることは何でしょうか。それは「主が戦われた」ということでしょう。10節を見ると、「主が彼らをイスラエルの前にかき乱したので」と書いてあって、主が主語になっています。そしてその後には3つの動詞がありますが、いずれも原文では主語が明示されていません。新改訳はその三つの動詞に「イスラエルは」という主語を補って訳していますが、いくつかの英語の聖書、またある学者たちは、10節の最初の主語が主であるように、その後の三つの動詞も「主」が主語であるとして読むのが自然であると言います。そうだとすると、10節はまさに主ご自身の働きについて強調して述べている部分となります。

続く11節以降も「主」が主語になっています。その11節に注目すべき主の働きが記されています。それはエモリ人がイスラエルの前から逃げて、ベテ・ホロンの下り坂にいた時、天から大きな石を主は降らせてエモリ人を打ったということです。ヨシュアとイスラエルは夜通しギルガルから上って行きましたが、その道はかなりの峠道だったようです。そしてさらに10節でベテ・ホロンの上り坂を上って行った。イスラエルはさすがに体力的にきつい状態にあったでしょう。そんな中、主が戦って下さった！イスラエルが追いかけている先で、天から降って来た大きな雹が次々にエモリ人に命中した。その結果、イスラエル人が剣で殺したよりも、雹の石で死んだ者の方が多かったのです！

もう一つ不思議なみわざが12~14節に記されています。ここでヨシュアはこう祈りました。「日よ。

ギブオンの上で動くな。月よ。アヤロンの谷で。」 ヨシュアはこの時、ギブオンとアヤロンの中間地点にいたと思われませんが、そこから見るとギブオンは東側に、アヤロンは西側にあります。そして東側のギブオンの町の上に太陽が見えて、西側のアヤロンの谷の上に月が見える時間というのは、早朝であることとなります。その状態が続くように！という祈りは、何を求めた祈りなのでしょう。それはおそらく、これ以上日が昇って太陽の光が照りつける状態にならないように、という祈りだったと思われ。夜通し上り坂を上って、エモリ人を急襲したイスラエルですが、今や夜が明けて、太陽が顔を出し始めました。このまま日が昇って灼熱の太陽が照りつけるようになるのはイスラエル人にとって不利です。みんなヘトヘトになってバテてしまい、せつかくのエモリ人を打つチャンス逃してしまいます。そこでヨシュアは、まだ気温が上がっていないヒンヤリした早朝の状態が長く続くことによって、効果的に戦いを進められるように、と祈ったのだと考えられます。

しかし果たしてこの祈りによって、太陽と月の動きは本当に止まったのでしょうか。つまり地球の自転が一時的にストップしたのでしょうか。もちろん神には何でもできると言ってしまうと、それで終わりです。しかし地球の自転が急に止まったら、地球上の存在はどうなるか。赤道付近は時速 1700 キロメートルで回転しているということですから、急に回転が止まったら、ものすごいスピードで地球上に存在するものは宇宙に投げ飛ばされてしまうはずではないか、と今日のある人々は言うかもしれません。

この箇所のある有力な見方の一つは、10～11 節と、12～14 節は同じ時のことについて語っていると見ることです。ヨシュアは 12 節で「日よ、動くな」と言いましたが、この「動かない」と訳されている言葉は「沈黙する」とか「静かにする」という意味の言葉です。いわば太陽に「静かにしている」「照りつけるようなことをするな」という意味でヨシュアが語ったと取ることができます。そしてそのヨシュアの祈りに答える形で空が暗くなり、何と天から雹が降って来た。ヨシュアはこの祈りをギブオンとアヤロンの中間地点で祈ったと 12 節にあります。その中間地点に雹が降った 11 節のベテ・ホロンの下り坂があります。ですからヨシュアの祈りに答えて、11 節の奇跡が起きたとも十分に考えられるのです。その結果、13 節にあるように、日は天のまなかにもありつつも、雹を降らせるふ厚い雲にさえぎられて、一日ほど出て来ることを急がなかった。地球の自転が止まったと言うより、太陽の輝きがこうしてブロックされ、イスラエルは体力を温存しながら戦いを続けられたということです。そればかりか、思いもしない雹が天から降って来て、イスラエルは大いに助けられた！

どのようにここを取るにせよ、この箇所が言っていることは、主はヨシュアの祈りにこのように答えて下さった、ということでしょう。いやヨシュアの祈りを越えて、とてつもないみわざを成して下さった。彼らが見たのは、「主が戦って下さった」ということです。聖なる神、偉大な神が共にいて下さり、自分たちの願うところ、思うところのすべてを超えて、この戦いを主導し、導いて下さった！

こうしてヨシュアとイスラエルはエモリ人の連合軍を圧倒します。彼らはほら穴に隠れた 5 人の王たちを捕らえ、引き出し、聖絶します。この聖絶は、これまでも見て来ましたが、彼らの積もりに積もった罪に対する主のさばきです。その際、ヨシュアは 24 節で、戦士たちのリーダーたちに「近寄って、この王たちの首に足をかけなさい。」と言います。ある人は、これは礼典にたとえられる行為だと言いました。25 節でヨシュアは説明をしています。「ヨシュアは彼らに言った。『恐れてはならない。おののいてはならない。強くあれ。雄々しくあれ。あなたがたの戦うすべての敵は、主がこのようにされる。』」すなわちこれはこれから明らかにされて行く主の勝利を見える形で先取りして表した

ものです。礼典と同じく、言うならば「見えるみことば」です。今朝の子供向けのお話の中でも、最初の福音の中に、女の子孫であるキリストが、蛇すなわちサタンの頭を踏み砕くという約束がありました。その見えるしるしがここにあります。あるいは新約のローマ書 16 章 20 節にこうあります。「平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。」ですから今日の章でエモリ人の 5 人の王にこのように足をかけた行為は、これを信仰によって見つめる者に大きな励ましを与えるものです。どんなに地上に悪がのさばっていても、神に逆らう者の勢力がいつまでもそのままにされることはない。神の正義が最終的に勝利し、主はその勝利の祝福に私たちを導き入れて下さるのです。

最後 28 節以降には、今回の戦いの記録が示されています。マケダからリブナへ、リブナからラキシユへ、ラキシユからエグロンへ、エグロンからヘブロンへ、ヘブロンからデビルへ。そのいずれの地においてもヨシュアは圧勝します。こうしてイスラエルは約束の地の南部一帯を、いちどきに攻め取ることができました。このような成果は「主によるもの」であることが改めて 42 節の最後に強調されています。「イスラエルの神、主が、イスラエルのために戦われたからである。」と。

今日の私たちも霊的な戦いのただ中にあります。私たちは自分の日々の生活また働きをもって神の栄光を現わすように！また行ないと言葉とをもって人々に福音を告げ知らせ、人々が主を信じる祝福に生きる者となるように！という、御国のための戦いに参戦しています。その戦いにおいても、今日の箇所から私たちが学ぶべきは、「主が戦われる」ということです。もちろん私たちは「主が戦われる」と言って、何もしないのではありません。8 節の主の約束に基づいてヨシュアは 9 節のように夜通し峠道を上りました。また 29 節以降の数々の戦いの記録においても、ヨシュアは「全イスラエルを率いて」という言葉がすべて繰り返されていました。すなわち手抜きをしなかった。全力を尽くした。主の約束を受けて私たちは一層勇気をもって取り組むのです。しかし覚えるべきは私たちの望みは主にこそある！ということ。主はヨシュアの祈りを聞いて下さったばかりか、まさかの雹まで降らせて下さった。そしてイスラエルが打ったよりも、はるかに多くの成果を出して下さった。この方が共におられることを見上げるなら、私たちは自分にもとてつもない可能性と望みとがあることが分かります。私たち自身に力はなくても、自分の想像をはるかに越える主の導きにあずかることができるのです。

私たちの戦いでも、主が戦って下さいます。その方を見上げて、みことばに聞き、祈り、自分の持ち場に出て行きたい。主はそこで下さげる私たちの祈りに耳を傾けていて下さいます。詩篇 91 篇 15 節にこうあります。「彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れを与えよう。」この主に信頼して、今週の私たちの戦い、主が戦われる戦いへ進んで行きたいと思います。